

---

# ムシウタ～夢のその先へ～

紡

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ムシウタ～夢のその先へ～

### 【Zコード】

Z2902F

### 【作者名】

紡

### 【あらすじ】

少年、有馬悠弋は虫憑きとなつた。生きるため……生きて夢を叶えるために、悠弋は虫憑きと戦つていく。 そう、それは最高で最悪のボーイ・ミーツ・ガールズ……。

## 序章、奪われる夢 1（前書き）

オリジナルな物です。本編主要キャラは一応登場します。

## 虫。

その異様な存在が囁かれて出したのは、数年ほど前からだったと記憶している。

人間の夢や希望を喰らうといつ、謎の昆虫 人々はそれを虫と呼んでいる。勿論、俺もそう呼んでいる。

しかし、国は虫の存在を認めていない。だが噂が囁かれたした頃と同じくして、目撃証言が増え始めたのは事実だ。

虫は人々の希望や欲求、つまり夢を糧として生きるという噂だ。そのため思春期の少年や少女にとり憑き、宿主の夢を喰らつて成長していく。虫にとり憑かれた者は虫憑きと呼ばれ、化け物を宿す人間として怖れられた。

だけど、虫憑きが怖れられる理由はそれだけではない。彼らは自らの夢を喰われる代わりに、虫によって超常の力を与えられる。例えればだが火を噴いたり、空を飛んだりと、その能力は多種多様だ。

新しい力を得るとはいえ、虫憑きは万能ではない。自らにとり憑いた虫を殺されると、それらが寄生していた心もまた破壊されてしまうのだ。

虫と道連れに心を壊された虫憑きは欠落者と呼ばれ、感情も記憶もない、他者からの命令を聞くだけの抜け殻と化す。

宿主が虫に夢を喰い尽くされた場合は精神が消滅し、肉体的にも死に果てるのである。

つまり虫憑きはになつた人間は、必ず虫と心中する運命を決定づけられているのだ。

これらの情報は全て、噂から入手したものだ。

しかし、噂は噂で終わらず、現実となつた。

「秋月悠哉。君は知つての通り虫憑きだ。大人しく我々に確保されるならば、両手を頭の上に上げて膝をつけ。抵抗、若しくは逃亡す

るのならば、必要に応じて君を傷付ける権利を我々は持っている。

傷付けられたくなれば、我々に従え」

「そう、俺は虫憑きとなつた。

「もう一度言つ。有馬悠式、我々に従え」

白いコートを身に纏つたその人物 多分、噂に聞く虫憑きを保護する機関、特別環境保全事務局、通称特環の局員 は、俺にそ

う言い放つた。

「……虫憑きで一番強いやつは誰だ？」

俺は気になつたので聞いた。だつて、強ければ強いほど、そいつの夢は大きいものだからだ。つまり、最強の虫憑きはどんな夢を持つているのか気になつたんだ。

「東中央支部のかつこうだ。しかし、俺は中央本部の局員だ。だから、かつこうに会うことは殆ど皆無だろ？」

「……俺は、中央本部に行くのか？」

「そうなるな」

「東中央支部に行くにはどうすればいい？」

「そりゃあ、東のやつらに捕まればいいに決まつていい」

「何処で？」

「東のやつらがいるのは桜架市だ。何故それを？」

今度は逆に、男が俺に聞いたきた。

「だつて……捕まるなら強い方がいいだろ？」

俺は挑発するよう言つた。

「……行きたきや行けよ。俺は別に、たまたまお前を見つけたから、たまたま保護しようとしただけだし」

男の反応は、予想と違つた。

「仁式は、それだけ言つて去つていつた。

「かつこう……」

俺は、自分の虫を見ながらそう呟いた。

「仁式望」

「名前は？」

「仁式望」

仁式は、それだけ言つて去つていつた。

「かつこう……」

俺は、自分の虫を見ながらそう呟いた。

「もしもし、警察ですが……」

絶望は、一本の電話から始まった。

両親が亡くなつた。電話の内容はそれだつた。

俺は、小学五年生である妹と共に、絶望に明け暮れた。

しかし、俺はもう十五。俺が……俺が妹を守らねば……。

そう思い……いや、そう心に決めた。幸い、俺の父親は剣道の達人で、剣の腕には自信があつた。まあ、剣といつても型は殆ど知ら

ず、結果我流となつた。それでも、妹を守る自信はあつた。

しかし、妹を守ると誓つた日から、妹が行方不明となつた。そして、妹の代わりに俺の隣りには虫がいた。

蟻。蟬の仲間であるそれに似ていた。

俺はその虫を見て気付いた。

「俺は、虫憑きになつたんだ」

と。

守る対象の妹はいない。

俺はどうすれば……。

そう考えていると、中央本部の局員、仁式望と出会つた。

仁式は俺を見逃すと同時に、ある情報をくれた。

最強の虫憑き　かつこう。

そいつの居場所を。

俺は、その最強の虫憑きに会つたため、おうか桜架市に向かつた。

「キミ、不合格」

「どわつ！？」

桜架市に着いた……のは良いが、いきなり黄色い雨ガッパを着た少女に襲われた。しかも、何故かアイスホッケーのステイックを持っている。

「何だねその虫はー。見るからに貧弱そうだ」

「……」

虫……つまり、こいつも虫憑き。俺は直ぐに刀を抜き放ち、戦闘態勢に入る。

「ふふん、日本刀か。そんな武器でボクを倒せるとでも思つているのかねー」

……ステイックよりはましだと思つ。

「早く虫を出したまえー」

「えつ……ひそかに！……」

俺は自分の虫を呼ぶ。

問題は無い。自分の虫の能力くらいは把握している。むしろ、この虫は俺の心に寄生したんだ。その俺の心の一部である虫の能力が分からぬはずがない。

俺の虫の能力は

「鳴き声による聴覚への攻撃、七色の羽を広げる」とによつての視覚への攻撃……。ボクのよつた戦士には通用しないなー

「なつ！？」

まさか、虫を出しだけで能力がばれるとは。

「ふふん、ボクは虫を出す必要性は無いとみた

「くつ！」

嘗められている。しかし、悔しい事に俺の虫は弱い。

そう、虫が弱いということは

「俺の夢が……弱い」

ということになる。

「あはつ……弱い？」

俺の夢が？ 俺の想いが？ ……たつた一人の肉親を守りたいと  
いう気持ちが……

「弱い？」

有り得ない。

だから、証明してみせる。この黄色ガッパを倒し、俺の夢が強い  
という事実を。

「あはつ……キエロ」

俺は虫を消す。この黄色ガッパに、虫は通用しない。ならば、邪  
魔なものは捨て置くだけだ。

「キミは実に良い具合に、壊れているね」

俺は黄色ガッパに耳を貸さず、跳躍する。

「キミには、戦士になる素質がある」

跳躍したあと、重力に従つて刀を振り下ろす。黄色ガッパは動か  
ない。どうやら、真正面から受け止める氣らしい。

……笑止！！

「あはつ！」

「だからこそ、虫が弱いのは勿体ないねー」

「……つ！！」

しかし、全力の一撃は軽く受け止められた。

「キミ」

そして、そのまま受け流される。俺はバランスを崩し、倒れる。

「不合格」

倒れた俺に向かつて、ステイックを振り下ろす。あのステイック  
が異様な威力を持っているのは知つていてる。だが

「殺し合いは、生き残った方が勝ちなんだよ」

俺はステイックに構わず、刀を突出す。

「……！」

が、寸前のところで避けられた。

「がつ！」

頭に鋭いようで鈍い痛み。気が……遠くなる。

「驚いたな。あの場面で諦めないとほねー。……キミ、合格

薄れつつある意識の中、そんな声が聞こえた気がした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2902f/>

---

ムシウタ～夢のその先へ～

2010年10月10日03時10分発行